

# 西洋の性格学

## —古典的体液気質論—

藤井忠義

### 目次

- I 気学について
- II 体液を基礎とする気質説
- III 私の作業（古典的体液気質論の検討）
- IV 現代の医学と心理学における性格学
- V 古典的体液気質論（パーソナリティの探究）
- VI 気質の対極的把握と感情の三方向説
- VII 気質の概念

### I 気学について

青葉が目には、太陽がまぶしい5月の季節となった。長い鬱陶しい冬空を仰いでいた目には、この五月晴の太陽はまぶしく、肌を過ぎ行く南風は何となく元気を感じさせる。御池通の白い建物と白い街路の緑の並木道をドライブしていると、そよとした風と共に幸福が舞い込んできそうに思える。まことに自然はうるわしいものである。（天気と元気に関する学は気学といわれる）

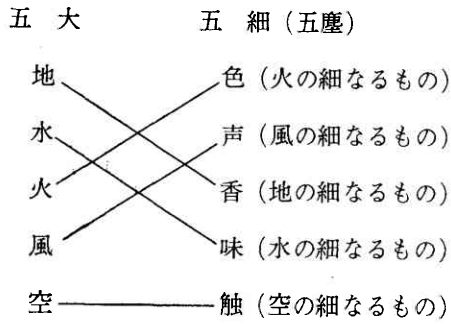
今を隔ること昔、印度河上流にきたアリアン民族は、かかる自然現象を神格化し、太陽・月・雨・火・風・雷・水・河などそのものを神として崇めた。印度河をサラスティー（弁天）と名づけ、初めは、川そのものを神として崇めたのであるが、後にそこから雄弁・音楽・文芸・福運の神を転成させた。かくて神に奉仕し、儀礼を司る教権階級（婆羅門族）が起った。

婆羅門族が思う儘に哲学的思索に耽ることができたのは、心の統一を目的とする印度森林仙居の生み出した冥想的生活の賜であり、動中静を見る工夫の結果であった。自然現象の神格視は、動中静を発見したため、かかる傾向は宇宙の本体を究め、宇宙の起源を思索し尽さんとして独特の気学になる宇宙創造説を生んだ。

印度の宇宙創造説は合成的造化論（原人の頭から婆羅門族が、脇から王族が、腹から農商民族が、足から奴隷族が生れる。万有も亦原人から分化して創造されたもので、天界は頭から、空界は臍から、地界は足から生じたとする。）で、創造神は梵天（ブラハマン）である。しかし、仏教以前の印度思想には多元論（具の哲学）もあり、たとえば、数論（サーンクヤ）哲学では五大、五細五塵を立てる。（図1参照）

宇宙は太初より多元的原素を有し、この五大の結合変化によって万有が生じるとみただのである。そのうち、四大本性（地性、水性、火性、風性）は、猶一層微妙な根本的原素で

図1 数論の五大思想



ある。この集積説は民衆説より出たもので、現在では Jaina 教 (耆那教) と称されている。そして、宇宙の本体たる梵 (宇宙我・大我・真我) に対し、個人の本体たる我 (個人我・小我・仮我) たる人間の肉体も四大 (地・水・火・風) という粗大な原素より組織せられているとみていた。

かかる印度の宇宙論に対し、紀元前6世紀のギリシヤ哲学 (miletus 派) でも同様の発展をなす。Thales (624~546 B. C.) は世界の根源は「水」であるといい、Anaximenes (588~524 B. C.) は「空気」であるとした。そして Empedocles (483~435 B. C.) に至って宇宙の四元素として、空気 (air)・水 (water)・火 (fire)・地 (earth) が唱えられる。

東洋 (中国を含む) の気学が五大または四大思想によって文学・医学・建築学・芸術にまで浸透し、易の理論は、古代の哲学・物理学・天文学として長く後世まで東洋文化の重要な要素として作用したに対し、西洋の気学は、Empedocles の次に出て来る Hippocrates (460~377 B. C.) によって気質の類型学ないしは体液の概念によってまた別な発展をするのである。が、Hippocrates の気学はまた、古典体液気質論の元祖として後世の西洋の性格学のみならず文学・医学に長くその権威性を持ち続けるのである。

このように、すべての生物は、大気 (天気下降・地気上昇) によって運命を先ず支配される。太陽と月を中心とする大宇宙は、また、小宇宙としての人間の世界にも影響を及ぼすことが考えられる。しかし、気学がパーソナリティをどのように考えるかは、また興味のあるところである。

## II 体液を基礎とする気質説

今日でも一般に行われている多血質、黒胆汁質 (憂鬱質)、胆汁質、粘液質の区別は、ギリシヤ医学の黄金時代、Hippocrates が Empedocles の四元説に基づいて樹立した生理学的学説であった。Empedocles (B. C. 450 頃) は宇宙生成の原理を地・水・火・風 (空気) の四元素に置き、大宇宙としての月や太陽に支配される世界観に一定の合理性を与えた。これは、大宇宙としての自然には、一定の理気 (四大) が働くという考え方であって、logos 的 (愛知的) で科学的実証を欠くアカデミック心理学以前のものであった。

しかし、この Empedocles の大宇宙の理气的考え方に対し、小宇宙 (Lotze) としての

図2 古典的理気説と性気説

Empedocles の理気説		Hippocrates の性気説	
宇宙の元素	その性質	対応する体液	相当する気質
空気 air	温・湿	血液 blood	多血質 sanguine
地 earth	冷・乾	黒胆汁 black bile	憂鬱質 melancholic
火 fire	温・乾	(黄)胆汁 yellow bile or cholera	胆汁質 choleric
水 water	冷・湿	粘液 phlegm	粘液質 phlegmatic

人間の体内にも性気（人間性としての気）が存在するという神秘的な考えを提唱したのは Hippocrates (B. C. 400 頃) である。彼は、体液気質説 (four “humors” or fluid in the body) を唱え、体液と性格との関係、すなわち身体 (physique) と行動 (behavior) の間の関係を述べた。何人も個人はこの体液を有するのであって、素質または体質 (constitution) に原因すると思われる病気という苦 (四苦の1つ) は、この体液に決定因があるとす。彼は病的状態から回復しようとする力を *フイジス* (Physis) と呼び、「病を医するものは自然である」との説を主張した。また、体型 (body types) を考えており、1つは短身幅広 (short and thick) で、他は長身瘦身 (long and thin) であった。このように、1つには体液 (内分泌物?) を行動の決定因とし、1つには体型を考えることは現代の性格学の強調するところと非常に一致している (Hoskins 1941)。

Hippocrates より後には2世紀頃 Galen が出て、粘液質を淋巴質 (液) としたが、大きな改訂はなかった。それで今日では、古典的体液気質学は、Hippocrates-Galen 説といわれている。

この性気説の重要な点は、人間性 (パーソナリティ) の根底に、精神身体医学的な根拠としての体液を導入したという点で、精神または心が、息 (psykhe, pneuma [希]; spiritus [羅]) や風 (anima [羅]; soule [英]; Seele [独]) や空気 (ghost [英]; Geist [独]) と考えられた語源の意味を考えても関連ある性気説を、新しい根拠のある気質論 (人間性学・人性学) としての出発点の持ち方としたということである。かくしてこの四体液によって精神活動の理法を明らかにせんとした古典心理学 (psykhe [心]+logos [理または学] [希]) は、その後、古代・中世を通じて19世紀まで不動の人間学となって続くのである。この系列に属する、すなわちこの四気質説を信奉する学者は幾多あり、自然科学・錬金術の発達に影響されながら (cf. Jacob Boehme, William Harvey) 発達した。

### III 私 の 作 業 (古典的体液気質論の検討)

Hippocrates の体液気質説は、古いパーソナリティ学説であるけれども、今でもパーソナリティ特性を評価するものとして文学や遊戯、映画や時には TV にも現われているようである。私の作業は、この依然として、文学・医学の基底的考えになりながら、今日でも心理学の中において、教養的基礎的思想概念として、古典的な気質論が支配している現状を概観する作業と共に、これ程にも現在でも権威をもって支配している古典的体液気質論が果した業績の後を振り返り、何をわれわれに残して来たかを考察することである。猶、Hippocrates の体型の流れを汲む体質的性格学 (Constitutional Psychology: E. Kretschmer 他) については紙数が許されないので割愛する。

### IV 現代の医学と心理学における性格学

現在でも医学の根底に厳然として存在している性格学は、性格を肉体的生理的現象の現われとみる Hippocrates (元祖) の考え方である。彼は、人間には、血液・淋巴 (Galen) ・黄胆汁・黒胆汁の四体液があり、それぞれ特有の気質タイプと結合していると考えた。すなわち、多血質は快活 (陽気)、その反対の粘液質は冷淡・のろま (平気・呑気) の意味に用いられ、胆汁質は憤怒性 (短気) をもち、黒胆汁はメランコリーとして憂鬱質 (陰気) の意味を持っている。また、この四液の種々の混合比例が総ての病気の根本と考えられ、それが脳髄に作用して気質を変え、精神病を起すとも考えられている (J. L. Entres)。し

たがって、性格・気質の表現者は遺伝的なものにより多くその責を負っていることになり、脳髓が中心であると考えられている。

医学における性格の概念には、1つには、性格を体液や脳髓の物質的個人差の表現と見る学派 (W. Griessinger, C. Broadman, O. Vogt, K. Wernicke 1874, P. Broca 1861, K. Kleist, O. Bumke) と、もう1つは、心理学的哲学的な見方をするもの (L. Klages, H. Hoffman, E. Kahn, S. Freud) と2つある。前者に属する内分泌 (W. Jaensch) や自律神経説、あるいは E. Kretschmer (1882—1962) の体型 (格) と性格の学説 (1955) は、Hippocrates の理念 (typology of physique) の科学的発展と考えられるのである。

Kretschmer は、現代心理学の権威的存在でもあるが、彼の場合、気質に躁鬱気質 (Cyclothymes Temperament)・分裂気質 (Schizothymes Temperament)・粘着気質 (Viscöses Temperament) を分けている。このうち粘着気質はてんかんと関連があるので、粘着質というのは一つのことを執着して変化したり動揺したりすることが少なく、几帳面で秩序を好み、重々しくて融通のきかない性格 (呑気) である。神経質なところがなく (平気) 安定しているが、思考や説明はまわりくどくて繊細さを欠き、ねばり強く、約束や規則は正直に守る。他人に対する態度は極度に丁寧丁寧であるが、時に爆発的に激怒して自己の正常性を頑くなく主張し、相手を非難・攻撃して非常に興奮する。これは Hippocrates の粘液質に相当するもので、S. Freud のいう男性的ヒステリーにも当る。

また、現代心理学のもう一人の権威者である、G. W. Allport も、心理生物学的基礎 (心誌の unigue trait) として気質を考えているのであるが、その根底には、古典的体液気質説の4分類を念頭に置いているのである。

図3 オルポートが基礎とした古典的気質類型

(2) \ (1)		感情 広		感情 狭	
		感情 強		感情 弱	
感情 強	感情 弱	胆汁質 (choleric type)		憂鬱質 (melancholic type)	
感情 強	感情 弱	多血質 (sanguine ype)		粘液質 (phlegmatic type)	

(訖摩武俊編著；性格の理論 p.148 より)

Allport が気質の特性 (traits) として挙げたのは次のような対極である。

- (1) 感情広—狭 (broad emotions — narrow emotions)
- (2) 感情強—弱 (strong emotions — weak emotions)

中世を通じてパーソナリティは人の健康や気質を決定する四気質ないしは体液の相対的比率が原因なりと考えられた。これはギリシヤの医者 Hippocrates の教示を受け継ぐものである。これらの教示は大地とか水とかの既知の宇宙のエレメントと結合している。これらのエレメントの1つの固有性は、人の場合、四気質のどれかに優性なものとして現われる。勿論どんな証拠も実験的確認も存在しない。全く未発達な学問形態のように聞える。そして全てのパーソナリティの評価は、外的な行為や外観に基づいてなされた。では、現代においてもこの古典的体液気質論が権威を持っているのは何か。それを論ずる前に、もう一度、以前の世紀の気質論 (性気説) を Hippocrates からみていこう。

## V 古典的体液気質論 (パーソナリティの探究)

### [Hippocrates の体液説]

(1) 血液について赤面は血液の過剰であると考えられるところのものを示すことによって、多血質（フランス語では残忍性を示す）は、1つの快活で楽天的な気質を示すと信じられていた。

(2) 粘液について手の冷たさとか湿っぽさ、ゆっくり動いている川のような冷たい不活潑な気質を示すと信じられていた（粘液質）。

(3) 胆汁・黄胆汁について黄色い、血色の悪い顔色は、胆汁質あるいは怒りっぽい性向を意味し、その人の性向は、た易く怒りを起す怒りっぽい短気な気質である（胆汁質）。

(4) 黒胆汁について暗い色黒の重い眉毛の顔色は憂鬱質（black mood）を示す。黒胆汁は脾臓から出て来ると考えられ、厳格・強情・不屈・憂鬱質・気むずかしい性質・不機嫌な性質・ひねくれた性質・落胆・失意の原因であると考えられた。

〔Galen（紀元前129～199?）〕 粘液生理学にその基礎を有し、Hippocratesに近い見方をした。四種の主要体液は、(1) 血液、(2) 粘液もしくは淋巴液、(3) 黄胆汁、(4) 黒胆汁で、四体液のいずれが多量なるかに関係して4気質に分けた。

- 1) 多血質 Sanguinisch (Blutig)
- 2) 粘液質もしくは淋巴質 Phlegmatisch (Schleimig) od, Lymphatisch
- 3) 胆汁質 Choleric (Gelbgallig)
- 4) 憂鬱質 Melancholisch (Schwarzgallig)

これらはもと、Empedoclesの自然哲学において重要な職能を演ずる物質の根本性質である寒冷および温暖、湿潤および乾燥の4種に対応するものである。

血液は風の如く温暖にして湿潤

粘液は水の如く寒冷にして湿潤

黄胆汁は火の如く温暖にして乾燥

黒胆汁は土の如く寒冷にして乾燥なりとする。

多血質は軽くして移り易く皮相的にして調節に巧みである（軽さ、易移性）。

憂鬱質は深けれども退嬰的躊躇的である（深くて重い）。

胆汁質は能動的構想および烈しい排除し難い頑強さがある熱情を有す（固さ）。

粘液質は柔軟寒冷にして遅緩なる反応および不活潑なる構想を有す（柔軟性と遅鈍）。

〔Jacob Boehme〕 その後の気質論の発展は、自然科学の発達をその儘反映し、16世紀の神秘主義者 Boehme は、その「キリスト知学」においてこの4気質は、人間の宝石（魂）が閉じ込められている違った収蔵庫であるといった。

Alchemyの時代は、4気質が最も重要な物質と関係づけられ、胆汁質は硫黄要素の支配により、多血質は水銀、憂鬱質は塩分の過量によると説明された。

〔Andreas Rüdiger〕 その著、「神の物理学（Physica Divina）」において、気質の差異の原因になる要素を、エーテル（気）と空気と考え、軽い性質の原因としてエーテルと、重い性質の原因としての空気が互いに中和し合って身体の弾力を与えるとした。

- 1) 多血質 エーテルも空気も共に精錬され弾力大
- 2) 粘液質 エーテルも空気も共に精錬されずに弾力小
- 3) 胆汁質 エーテルは精錬され、空気は精錬されず弾力重し
- 4) 憂鬱質 エーテルは精錬されず、空気は精錬されている。収縮は容易であるが拡張は困難。

〔Harvey William〕 彼は血液循環の法則を発見し、体液に新しい見方をもたらした。

血圧の強さや血管の太さなどに対する知見は参考になる。

[**Stahl & Hoffmann**] シュタールは血液の組成と組織の多孔性と血管の太さの三因子を考えたが、同僚のホフマンが次の表のようにまとめた。

図4 Stahl & Hoffmann の気質説

気 質	多血質	粘液質	胆汁質	憂鬱質
血 維	流動的	濃厚	流動的	濃厚
織 維	粗	粗	密	密

[**I. Kant** (1724~1804)] Kant はその「人間学 (Anthropologie)」に気質論を展開している。彼によれば、性格は思惟様式 (Denkungsart) であるに対し、気質は感性様式 (Sinnesart) である。そして感情 (Gefühl) の気質に対し、活動 (Tätigkeit) の気質を考え、それに生活力の興奮と弛緩を対せしめている。

図5 Kant の 気 質 型

生活力に対し	感情の気質	行動の気質
興奮 Erregbarkeit intentio	軽血質 leicht Blutig (多血質)	温血質 (胆汁質)
弛緩 Erregbarkeit remissio	重血質 schwer Blutig (憂鬱質)	冷血質 (粘液質)

- ・多血質は動きが速く力あるが浅く (軽血質)
- ・憂鬱質は深いが遅く永く続く (重血質)
- ・胆汁質は速く (温血質)
- ・粘液質は怠慢というわけでもなく行動への感情的刺戟を欠く (冷血質)

軽血質・重血質が実践的方面を感情から了解しているに対し、温血質は急激に沸騰する情緒の元型をみ、冷血質は弱き情緒的態度に関する元型を行動から求めている。

[**Cabanis**] 組織の構造、脾臓、肺、筋肉などの器官の発達状態を重視した。

- 1) 多血質, 2) 胆汁質, 3) 粘液質, 4) 憂鬱質, 5) 神経質, 6) 筋肉質

[**J. F. Herbart** (1776~1841)] 教育の基礎として心理学を説いた彼は、Kant の影響の下に神経生理学の勃興に依り、4つの気質のうち、陽気 (多血質) と陰気 (憂鬱質) は感情に関係し、短気 (胆汁質) と呑気 (粘液質) は情緒の興奮性に関すると考えた。

[**Lotze**] その著「小宇宙 (Mikrokosmos)」において、憂鬱質に代るに情操質 (センチメンタル) という語を用いた。

[**Johannes Müller**] 気質は、心的生活の型式であって、Schelling の三つの形式 (生殖性, 興奮性, 感受性) は temperatures (陽気度) と呼ばれるという。

- 1) 生殖型
  - 1) 粘液質 a, 弱い粘液質
  - 2) 粘液質 b, 持続的な粘液質
- 2) 興奮型
  - 3) 多血質
  - 4) 胆汁質
- 3) 感受型
  - 5) 感受性気質
  - 6) 憂鬱質

[Julius Bahnsen] 彼は、「性格学論文集」(Beiträge zur Charakterologie 1867) (始めて性格学 Charakterologie という語を使った) によって、気質は、1) 自発性 (Spontaneität), 2) 受容性 (Receptivität), 3) 印象性 (Impressionalität), 4) 反応性 (Reagibilität) 等の諸性質の種々の度合に基づくものと考え、さらに、気質に次のような対極をえ考た。

1. 自発性に関し = stark (強) — schwach (弱)
2. 感受性に関し = rasch (速) — langsam (遅)
3. 印象性に関し = tief (深) — flach (浅)
4. 反応性に関し = nachhaltig (久) — flüchtig (暫)

彼はこれによって4つの性質と8つの特性を含む16の気質 (胆汁質 a, b, c, d, 多血質 a, b, c, d, 粘液質 a, b, c, d, 貧血質 a, b, c, d) を導出した。このうち貧血質 (anämatisch) というのはもとの憂鬱質に代るものである。

図6 Bahnsen の気質類型

		自発性	感受性	印象性	反応性	気 質
1	I	・強	・速	深	久	胆 汁 質 a
2	I—I	・強	・速	深	久	胆 汁 質 b
3	I—II	・強	・速	深	暫	胆 汁 質 c
4	II	強	速	・浅	・暫	多 血 質 a
5	II—I	弱	速	・浅	・暫	多 血 質 b
6	II—II	強	遅	・浅	・暫	多 血 質 c
7	III	強	・遅	浅	・久	粘 液 質 a
8	III—I	弱	・遅	浅	・久	粘 液 質 b
9	III—II	強	・遅	深	・久	粘 液 質 c
10	IV	・弱	速	・深	久	貧 血 質 a
11	IV—I	・弱	速	・深	暫	貧 血 質 b
12	IV—II	・弱	遅	・深	久	貧 血 質 c
13	I—III	弱	・速	浅	久	胆 汁 質 d
14	II—III	弱	遅	・浅	・暫	多 血 質 d
15	III—III	強	・遅	深	・暫	粘 液 質 d
16	IV—III	・弱	遅	・深	暫	貧 血 質 d

[W. Wundt の気質論] 情緒の反応の強弱とその変化の遅速との組み合わせから気質を分類した。

彼によれば、情緒的反応が強い気質では不快の情緒を、弱い気質では快の情緒を起こし易い。したがって、前者は悲観的、後者は楽天的に傾く。また、

情緒的反応の速い気質では現在の刺激に動かされ易く、遅い気質では現在の変化には動かされずに将来のことを考える傾きがある。

- 1) 胆汁質 (choleric) — 熟慮を欠いて怒り易い (短気)
- 2) 多血質 (sanguine) — 快活で事物に対して淡白 (陽気)
- 3) 憂鬱質 (melancholic) — 哀愁に傾いて用心深い (陰気)

図7 Wundt の気質タイプ

情緒反応	強 弱	
	速	胆汁質
遅	憂鬱質	粘液質

4) 粘液質 (phlegmatic) —事物に対して冷淡で思慮深い (呑気)

Wundt は民族により、地方により気質の差異が見られると共に、高等動物にも気質差があると説いている。また、人間としては、各気質ともその長所と短所を持つものであるから、修養によって感情の動き (Gemüts bewegungen) や衝動の強弱を統御し、一つの気質に偏せず、これらの凡てを統合するように努めるのが人生の真の道であると述べているのは、かの Hippocrates の自然良能力の説に似ている。すなわちこのことは、日常生活は、小さな喜びや悩みにおいて多血質で、人生の重大事件の場合には憂鬱質で、深い興味を捉える印象に対しては胆汁質で、決心を遂行するに当っては粘液質だからであることを述べている。

[Pilo 1892] 人間の基本的な差異を血液の化学組成とその熱度に求め、これから、多血・漿液・胆汁・淋巴の四つの一般的な気質を分けた。

[Nicolas Seeland の気質論] ロシアの人類学者 Seeland は、気質は神経系統、特に脳髄における分子の振動によるものであるとの説を提唱した。

1) 強い積極的な気質—陽気な気質と粘液質

1—1 非常な多血質…これは植物的生活が優越し反応が速く適当であるもの

1—2 低い度の多血質…これには神経質も交ったものがある

1—3 平静な気質

2) 中位または中性の部類—大部分の人が含まれる

3) 弱い消極的な気質—その反応が速・遅であれ、不規則を特徴とする

3—1 憂鬱質

3—2 神経質…活動の抑鬱の交替

3—3 胆汁質…高い興奮性を主な特徴とする。この部類は時には多血質または憂鬱質と結合。

陽気な気質は速い調和的な分子の振動により、粘液質はもっと遅い速さの変らぬ振動により、中性気質はさらにもっと遅い恒常的な振動により、消極的な型は遅くて調子外れのあるいは速いが中断された振動によって成立する。彼はなお、人類学的測定によって、気質と体格、または、体力・精神機能などとの関係を論じている。(陽気な多血質的な人…大ロシア人 [農村]。粘液質…小ロシア人 [ウクライナ人]、オランダ人、イギリス人、ノルウェー人、フィンランド人)

[Stevenson 1913] イギリスの彼は、従来の4気質説に宗教的立場から、常識的な2つの気質をつけ加えた。その2つとは、5) 芸術家的と6) 実際的である。

[Kreibig: Psych. Grundl. eines System der werttheorie] 感情の内容的性質を基礎として気質を分類し、それと品性との関係を明らかにする。

1) 活潑なる快反応の傾向—強き執意 (多血質)

2) 活潑なる不快反応の傾向—強き執意 (胆汁質)

3) 活潑なる快反応の傾向—弱き執意 (粘液質)

4) 活潑なる不快反応の傾向—弱き執意 (憂鬱質)

[E. Meumann (1862-1915): Intelligenz und Wille] Wundt の弟子の彼は、気質を感情生活の上に限りに、しかも快不快の情緒を次図に挙げた動作の感情的形式に影響する2段の程度と関連せしめた。H. Ebbinghaus (1850~1909) もこれを感情生活の楽天的もしくは厭世的素質と、情熱的活潑的もしくは抑鬱的持続的性質とに関係して分類し



図 8 感情の動作に対する一次的関係

感情の顕著なる性質	感情の強度及持続性		刺戟に対する感情反応の容易性及迅速性		能動性—所(受)動性	
	小	大	小	大	能動性及大なる興奮	所動性及小なる興奮
快	多血質	粘液質	粘液質	多血質	多血質	粘液質
不快	?	憂鬱質 胆汁質	胆汁質	憂鬱質	胆汁質	憂鬱質

図 9 感情の動作に対する二次的關係

感情の顕型	内 観 的	外 観 的	外的に興奮	内的情態によりて興奮
快	多血質	粘液質	多血質	粘液質
不快	憂鬱質	胆汁質	胆汁質	憂鬱質

た。

[Fouillee: Temperament et Caractere selon les individus] フランスの彼は、自然の生命力のリズムとして、生物の有機的物質なる原形質を考え、一は、求心的な内化（聚成）作用をとり集中的であるといい、二は、遠心的なる外化（開発）作用で拡大的であるとした。こうして気質に、感受的と発動的なる二大区分を設けた。そして感受および開発、すなわち、知覚および活動の平衡を調節するものは神経系統であるから、神経内部の原形質の変化（緩性）における速度および強度によってこれを小分した。

- I. 感受的 { (活潑的) 内化：栄養衝動強大  
 (軽快的) 反応：迅速強大，暫続——1. 多血質  
 (深刻的) 内化：栄養不足  
 (情熱的) 反応：遅緩・弱小，永続——2. 憂鬱質
- II. 発動的 { (熱烈的) 外化：迅速，強大——3. 胆汁質  
 (寒冷的) 外化：遅緩，弱小——4. 粘液質

- 1) 反応の迅速の感覚的な型→多血質
- 2) 反応の強烈な型→神経質
- 3) 迅速で強い反応の活動的な型→胆汁質
- 4) 遅くて弱い反応の活動的な型→粘液質

[Ribéry: Essai sur la classification naturelle des Caractère] Ribéry は感覚および運動神経の対立と、印象、反応の強度および速度とに関して分類した。

- I. 感受的気質 { I—1 多血質（弱小，迅速）  
 I—2 神経質および憂鬱質（強大，遅緩）
- II. 発動的気質 { II—1 胆汁質（強大，迅速）  
 (活動型) II—2 粘液質（強大，遅緩）

Ribéry: は、その他、無定型、平衡を得た気質、感受・活動型（多血質，胆汁質，神経質）というものも考えている。

[Willy Hellpach (1877-1955) の気質論 (1951)] 彼は社会的気質 (Sozialtemperament) として和気 (friedlich, irenisch) と争気または滅悪趣の気 (streitbar, eristisch)

を分けているが、個人的な気質については伝統的な気質の不十分性を唱え、内的力動の表現である気質に5つの基本的尺度が存在するとした (Sozial-Psychologie 1951. p. 53)。

1. stark (強い, 不屈な) ↔ schwach (虚弱な, 意気地のない)
2. rasch (性急な, 短気な) ↔ langsam (遅鈍の, 飲込みが遅い)
3. reichlich (豊かな) ↔ spärlick (乏しい, 貧弱な)
4. nachhaltig (ねばり強い, 永続的な) ↔ flüchtig (一時的の)
5. gleichmäßig (均衡のとれた) ↔ ungleichmäßig (不均衡の)

[Pavlov, I. P.: Lectures on Conditioned Reflexes 1928] Pavlov は、長年にわたる犬の高次神経活動の研究から、条件反射の際の反応の速度によって、犬を4つに類型づけた。

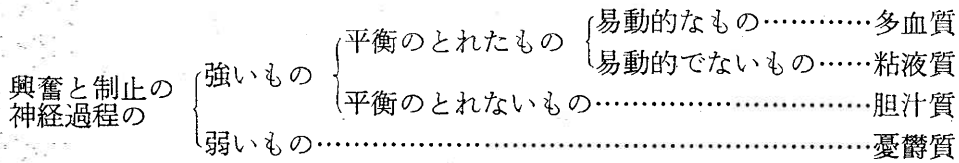
- 1) 強い, 均衡のとれた, 易動的で活動的なタイプ (→多血質)
- 2) 強い, 均衡のとれた, 不活潑で, 静かで落ちついたタイプ (→粘液質)
- 3) 強い, 不均衡で, 興奮過程が制止過程よりも強いタイプ (→胆汁質) —興奮型
- 4) 神経過程の弱いタイプ (→憂鬱質) —制止型

これらの4つの類型は、古典的類型に対応するものであるとした。そして Pavlov による神経系の基本的特性としては次の三つである。

- 1) 興奮過程と制止過程の強さ (または弱さ)
- 2) 2つの過程の易動性 (または不活潑性)
- 3) 2つの過程の均衡性 (または不均衡性)

神経過程の強さは、脳神経細胞の作業能力または持久力をあらわしている。普通、刺戟が強いと興奮も強い。ところが、刺戟が余りに強いと時には神経障害まで起したりする。だが、その限界は犬によって異なる。この学説の重要な特色は、人間や高等動物の行動は、神経系によって規定され、支配されているとする点で、行動の一般的タイプないし気質は、神経系のタイプの表現であり、さらにその神経系のタイプは、神経系のもついくつかの基本的特性の複合から理解される。さらに彼は、Kretschmer の類型論にヒントを得てこれをさらに深め、程度の低い憂鬱質 (「制止型」の弱い形式) は、ヒステリー性格、程度の高い憂鬱質 (より極端な「制止型」) は分裂質に一致するとし、同様に胆汁質も神経衰弱 (より高度の「興奮型」) と躁鬱質とに一致するとした。そして憂鬱質は、大脳皮質が脆弱で一部変質しているため、自己抑圧・高い被暗示性・外界の変化に対する不適応性などの性向をもち、ある犬たちは、条件づけが形成されるのが遅く、出来上っても弱く大変不安定な「制止型」で、胆汁質は健全な大脳皮質をもつもので適応性が高く、この犬は、条件づけられることが大変早く、しかも一度条件づけられた反射はなかなか消えない「興奮型」である。これら2つの極端なタイプの間に関与と制止の平衡のとれているグループが多血質と粘液質である。そしてこれらの体質的違いは遺伝によるのだと考えた。Pavlov の説は幾分かじつけのであるが、遺伝的体質による性格質を考え、さらに哺乳類と人類との間の条件反射の原則は同じだとした点示唆に富むものである。

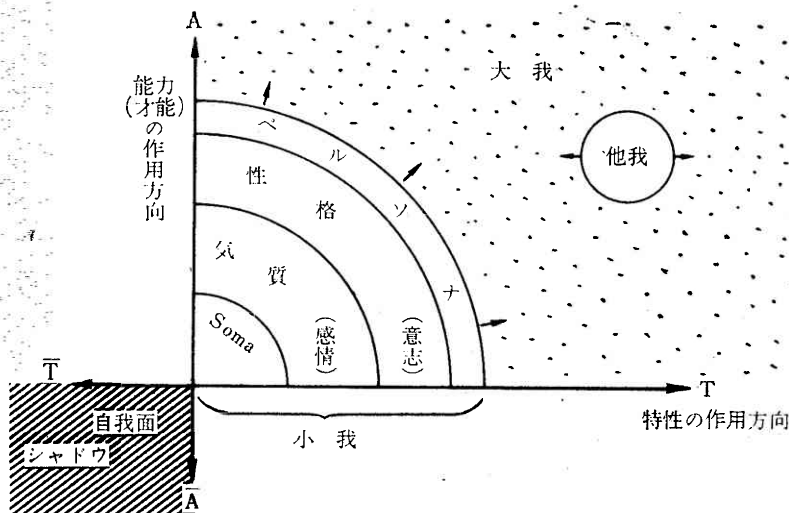
[芝田進午 1965] 芝田によれば (Pavlov の説を継承している)、大脳皮質の基本的運動過程は興奮と制止であり、(1) 環境からの刺激にたいしどれだけ耐えうるかという興奮と制止の強さ、(2) 興奮と制止の力相互間の平衡度、(3) 環境の変化にたいしどれだけたやすく変化できるかという易動性によって、神経系の基本的な4つの型、あるいは気質が分類される。



しかしこれらの型は基本的なものであって、現実には神経系の型（気質）は、実験的なデータが示すように、4つに限られず、重なりあい、複雑であるとする。そして彼によれば、これらの型は、遺伝型（Genotype）である。そして固定した不変のものではなく、環境によって形成・再形成され（後天説）、あるいは形成しなおされて表現型（Phenotype）となるのである。このように個体発生の過程で形成された表現型が、性格の生理学的基礎をなしているのであるが、この場合、気質は主として神経系の型と関連し、性格は特に環境と関連しているのである。この時、性格は、その後天説の故に、ダイナミック・ステロタイプ（力動的常同型）として形成されるし、そう規定される。

ここにはパーソナリティの適応の問題が大きく働いているのであって、気質と性格は弁証法的統一発展に関わる2つの局面であって、この故に、高次神経活動を行う動物の適応が、うまく行われるのである。こうして気質は、植物性神経系（自律神経系・内臓神経系：呼吸・循環：腸・尿性器・血管などの平滑筋・心筋・内分泌腺が関係）の代表と解されるのであり、性格は動物性神経系（体性神経系；知覚・運動：感覚器官→興奮伝達→脳→有線骨格筋系）に関係することが多いと考えられる。神経系をその座から、中枢と末梢神経とみるのではなく、機能的に、植物性と動物性神経にみることによって、こうして、その自我—環境体制のダイナミック性の基礎が布かれるが、そのパーソナリティの表現型が、somatic（体性）に依存している限り、気質と性格の同一視を起し易いのである。こうして気質の概念は先天説（素質説）をとり入れ、性格の概念は後天説（経験説）をとり入れる。こうして現代の気学は、ここに於て、神経系の型に依存する気質と、気質の表現型を基礎にする性格との均衡発展的な姿としてパーソナリティを考えていることになる。気質は大気と息づく器官であり、元気の発揚する通気口である。性格は、植物性神経系と動物性神経系とを従えて、環境に働きかける触手である。そして経験における打開的防衛的、又は外部開口の作用力を持っているのが自我に於ける性格の強さであると考えられ

図10 パーソナリティの断面



る。自我の発達、こうして素質と経験との両極を交互する周期的 (cyclic) な連続性を持つものとして考えられる。こうして性格面の沈黙物は気質面に沈黙し、または濾過する (気の清濁) ののである。さらにつけ加えておかなければならないことは、気質は体性的であるが、性格は、社会的・文化的な条件の表現であるということである。こうして性格は能力を縦軸としてペルソナを殻に持つということが出来る。(図10. 参照)

ペルソナの中に役割 (role)、能力の中に知能を (intelligence)、シャドウの中に Me (Mead, G. H.) の概念を含むことができる。A, Tで囲まれた象限は、環境 (E) の象限であり、その反映として、自我 (shadow) が考えられる。後述のように古典的体液気質論から、10の気質の特性が考えられるのは、T—Tの軸上に働く特性であるといわねばならない。A—Aの軸上に働く特性は、また別に論じらるべきである。

こうして気学において問題であったパーソナリティというものは、このような図の統合的解釈として clarify されうる。また、この論文の総合的把握になる気質特性は、こうしてパーソナリティの断面の横軸 (T—T) の上に正しく位置づけられうるのである。

最後にこうして、沢庵禅師が述べている (警捜集) 人格体系としての気 (性, 機) が、気質 (性) と性格 (機) に対応する説をうる事が出来る。しかしこれについてはまた稿をあらためなければならぬ。

[Heymans, G & Wiersma, E. D. 1927] この二人の気質学説によれば、気質は、1) 一次機能—二次機能, 2) 活動性, 3) 情動性の三つの変数の合成によって成立し、8つの主要特性が考えられる。一次機能とは衝動的・活潑・移り気・注意散漫・むら気などの特徴をあらわしている。そして、一次機能は、後述の第一期の様相が濃いものである。

1. 情緒的—非活動的—一次的……神経質
2. 情緒的—非活動的—二次的……感情的
3. 情緒的—活動的—一次的……胆汁質
4. 情緒的—活動的—二次的……情熱的
5. 非情緒的—活動的—一次的……多血質
6. 非情緒的—活動的—二次的……粘液質
7. 非情緒的—非活動的—一次的……無気力
8. 非情緒的—非活動—二次的……無感動

## VI 気質の対極的把握と感情の三方向説

前節において23人の学者を列举し、古典的体液気質学の発展して来た足跡を見たのであるが、われわれにとって必要なことは、ここで、彼らは何を探究せんとし、どのような心理学的成果を獲得したかということを知ることである。

さて古代の性格学はどのような人間理解をしたであろうか。現代においては人格 (パーソナリティ) を、能力 (ability)・気質 (temperament)・性格 (character)、または、知 (intelligence)・情 (emotion)・意 (will)、または知性・感性・理性に3分して理解するのであるが、古代においてはこの区分は明確でなく全体的に考えている。したがって古代の性格学は気質学であり人間学である。しかし、宇宙の理氣的な観念 (idea) から性気的人間学に入る点、気学的であり気質学的である。Aristoteles には観相論があり、中国

においては易を中心とする陰陽五行の流行から陰陽清濁に分ける気質説があったが、前節からも明らかなように、西洋の性格学は、Hippocrates を中心とする気質説から始る。そして注意すべきは、洋の東西を問わず、その心理学の性格は、物質の認知から比喩をもって入る物理学的自然科学的思考法に依ったということである。固体 → 液体 → 気体の概念と、動と静の概念はこの思考法の支持的概念となる。こうして、Hippocrates の体液（血液その他）、Rüdiger のエーテルの概念が出た。これは Heracleitus (541~475 B. C.) の万物流転説（パンタライ [πανταρχει]）の影響がある。Galen の気を気体とみる説、Rüdiger の空気とみる説も物理学的思考法による。こうして Hippocrates から Kant までの気質の概念は次のようなものになった。

※ Hippocrates から Kant までの対極的気質の把握（第一期的様相）

1. 温（暖） ↔ （寒）冷。〔Hippocrates, Galen, Kant などの見方〕
2. 湿（潤） ↔ 乾（燥）。〔Hippocrates, Galen〕
3. 流動的 ↔ 濃厚〔Stahl, Hoffman〕
4. 粗大 ↔ 精練〔Rüdiger〕
5. 弾力大 ↔ 弾力小〔Rüdiger〕

この第一期的様相は気質の類型学（temperament typology）であり対極的把握（Pol-Gegenpol）によって成立している。類型（type）を考え、対極（Polarität）を考えると、立派に物の科学ではなく心の科学となっている。なお、第一期的様相とも次の様相とも、4 気質を別に考えていることはいうまでもない。

このようにして素朴にはじまった気質学は第二期においてまた別の発展をする。まず、Kant は、現在の馬学（動物学の 1 つ）でなされている軽血種、重血種の考想を導入し、以下、Allport まで非常に心理学的な特性（trait）論に依った。

※ Kant から Allport ままでの対極的気質の把握（特性論：第二期的様相）

1. Leicht（軽） ↔ schwer（重）  
〔Kant. 軽い気・重い気概念である。また、感情刺戟に対する反応の容易性（易もしくは難 Maumann）についていうものである〕
2. rasch（速） ↔ langsam（遅）  
〔Kant, Wundt, Bahnsen, Hellpach: 過敏な気骨、活潑な気転、遅鈍な血のめぐりをいう特性。Maumann は、感情反応すなわち感情興奮の迅速性について schnell（敏）という特性を考える〕
3. tief（深） ↔ flach（浅）  
〔Kant, Bahnsen, Hellpach: 深い情動、浅い情緒的感性などの動きに関する特性〕
4. nachhaltig（久） ↔ flüchtig（暫）  
〔Kant, Bahnsen, Maumann, Hellpach: 持久的耐性、暫時的情動に関する気質特性〕
5. reichlig（豊） ↔ spärlich（乏）  
〔Hellpach: 豊かな感情、乏しい貧弱な気質的品性をいう〕
6. gleichmäßig（平衡） ↔ ungleichmäßig（変調）  
〔Hellpach, Pavlov: 平衡を得た気持の持ち量、平静な心に対し、変調な分裂的気格、興奮動揺的性格をのべる〕

7. stark <strong> (強) ↔ schwach <weak> (弱)

[Wundt, Bahnsen, Maumann, Hellpach, Allport: 強い気性, 弱気の弱腰などの特性]

8. <broad> (広) ↔ <narrow> (狭)

[Allport: 広量な気構・気の幅, 狭量な気を持ち主などの特性]

このようにして Kant, Bahnsen を経て, Wundt の流をくむ Hellpach において気質の19世紀的対極把握が完成する。そして Hellpach において最大に数えられた特性が Allport ではむしろ2つの対極(特性)に減少するのである。

さて, 気質を情緒的素質 (Affektanlagen) とし, 性格または品性を意志的 (執意的) 素質 (Willensanlagen) とし, この2つを以て情意的素質 (Gemütsanlagen) としたのは Wundt であるが, このような心的素質 (geistige Anlagen) の感情的基底に対する考え方には当時の同時代的流行的思想があり面白い。Wundt は, 情調 (tone) には三種あるとして, 快—不快 (Lust od. Unlust), 興奮—沈静 (Erregung od. Beruhigung), 緊張—弛緩 (Spannung od. Lösung) の感情の三方向説 (「心理学概論」 Grundriss der

図11 Kretschmer, E による気質の特徴

感情的素質傾向 \ 気質	循環気質	分裂気質	粘着性気質
精神感性と気分素因	気分素因の均衡: 高揚 (明朗) ↔ 抑鬱 (悲しみ)	精神感性の均衡: 感性過敏 (多感) ↔ 感性鈍麻 (冷淡)	爆発性 ↔ 粘液質
精神のテンポ (心理的速度)	波動的な気質曲線: 活潑 (軽快) ↔ 緩慢 (悠然)	跳躍的な気質曲線: 突飛 ↔ 頑強 (ねばり強い) 感情と思考の二者択一的様式	粘り強い気質曲線
精神の運動性 (心理運動性)	刺戟に順応し, 円滑で自然かつ柔軟性がある。	しばしば刺戟に順応せず緊張し, 抑圧, 跛行, 鬱結, 硬固, 硬直, 麻痺, 無力	刺戟に順応し, 緩慢, 慎重, 精確, 重苦しく鈍重でゆっくりしている。
体格の親和型	肥満型	細長型	闘士型
	Cyclothymiker	Schizothymiker	Viscöse
Psychästhesie und Stimmung	diathetische Proportion: zwischen gehoben (heiter) und depressiv (traurig)	psychästhetische Proportion: zwischen hyperästhetisch (empfindlich) und anästhetisch (kühl)	zwischen explosiv und phlegmatish
Psychisches Tempo	schwingende Temperamentskurve; zwischen beweglich und behäbig	springende Temperamentskurve: zwischen sprunghaft und zäh, alternative Denk- und Fühlweise	zähe Temperamentskurve
Psychomotilität	reizadäquat, rund, natürlich, weich	öfters reizinadäquat, gespannt, verhalten, lahm, gesperrt, steif usw.	reizadäquat, langsam, gemessen, schwerfällig, wichtig
affiner Körperbautypus	psyknisch	leptosom	athletisch

(E. Kretschmer: Körperbau und Charakter 1951 p. 336.)

Psychologie, 1896) を唱えた。しかし、Kant には興奮と弛緩 (Erregbarkeit intentio & remissio) の考え方があり、Höfding は、感情の快・苦の支配を考えていた。Kretschmer は、古典的気質説の多少共の発展 (分裂質と躁鬱質) を考えて、1) 刺戟感受性 (感情の起こり易さ、2) 気分の色合 (快調か不快調か)、3) 心理的速度、4) 心理運動性の4種の質に分って気質を経験的に概観している。

回帰性ないしは循環性気質対分裂性気質 (cyclothymia-v-schizothymia) は、Cattelle, R. B. の因子 (factor) にもみられるが、E. Kretschmer によるこの特性の対極的把握 (Typ-Gegentyp) は、凶からの特徴からもわかるように、(9) 高揚↔抑鬱 (gehoben-v-depressiv または heiter-v-traurig) ないしは活潑↔緩慢 (beweglich-v-behändig)、(10) 過敏↔鈍麻 (hyperästhetisch-v-anästhetisch または empfindlich-v-kühl) ないし突飛↔頑強 (sprunghaft-v-zäh) という傾向である。これも、Kant から Allport までの対極的気質の把握の第二期の様相として、9) 10) として数えてよい。こうして Allport の個人心理学が、古風で旧式なものともみられるように、Kretschmer の体質的心理学も、西洋の性格学として古典的体液気質論の土壌に育った感が濃い。

## VII 気質の概念

W・Hellpach もいうように、多血質とか粘液質という名称だけでは、非常に不十分な気質概念である。この不十分性に対する一つの成果は、前節で明らかのように、対極的気質特性を考えるという着想が出されたということであり、二つには、感情の三方向説が提出されたということである。これによって現代心理学は、感情の素質としての気質の概念を、非常に明るい見通しの下に照準することができるようになった。

さて Maumann はかつて感情的形式に対して5つを区別したが一応概観してみよう。

1. 感情の強度 Intensität (Stärke od. Lebhaftigkeit) …… 強さと活潑性。これに強弱あり (starke↔schwache)
2. 感情の時間的持続性 Nachhaltigkeit …… これに長短あり (nachhaltige↔flüchtige), (a) 弱くて長い快不快の感情は気分 (Stimmung) とし、(b) 強くて短い快不快の感情は激情 (Affekt) と名づけている。矢田部によると、比較的強度の弱い永続的状态は気分 (mood) であり、比較的強度の強い一時的状態は情緒 (emotion) である (心理学初歩, 1956)。1と2の協同において、気分、情緒、激情 (cf. passion. Leidenschaft) の成立をみる。
3. 感情刺激に対する反応の容易性 Leichtigkeit …… これに易・難 (leichte od. schwere) あり。
4. 感情反応すなわち感情興奮の迅速性 Schnelligkeit …… これに遅・速、鈍・敏 (schnelle. od. langsam) あり。3と4の協同によって、回帰性気質と分裂性気質の成立をみる。
5. 感情の表白もしくは表出 Äußerung od. Ausdruck (51) 運動的 motorisch (随意筋および四肢・顔容・身振りの緊張でわかる) (52) 血管運動的 vasomotorisch (血管・淋巴管の運動が示す) (53) 中枢的神経系統の興奮 die Erregbarkeit des Zentralnervensystems の変化において顕われる情緒の性質 (能動的 aktiv と受動的 passiv がある)。

感情成立には外的刺戟によって興奮するものと、構想・思惟によっての内的経験によっ

て興奮するものとあるが、いずれも情緒は興奮 (Excitement) から発するとみてよいであろう (Bridges 1932, L. Cole)。自己の身体的・心理的な存在 (諸要求・目的・体面・面目・自尊心) がおびやかされたと感じたときに衝動的に惹起する心理的・身体的な激動・興奮・焦燥・混乱状態はみな情動または情緒 (emotion, Affekt) である。情動はしたがって次の4要因を含む。

- 1) 環境刺戟の知覚 (不明瞭で瞬間的な知覚であることもある)
- 2) それに伴う強い不快感または快感
- 3) 刺戟を避けて逃げようとか努力して刺戟と戦おうとかする運動傾向
- 4) 心臓や血管・呼吸・発汗・消化機能・内分泌腺など全身の激しい生理的变化 (心理学辞典 平凡社)

このようにして、実際には種々の感情 (情動) の種々の形態があるのである。基本的情動 (primary emotion) に関しては, Shand, A. (1920), Ribot, T. (1903), Mc Dougall, W. (1926), Watson, J. B. (1919), W. Hellpach (1951) などがあるが割愛する。Hippocrates-Galen 説が挙げているのは次のようなものであった。

- 1) 多血質 (土着・建設性: 陽気) ……快活で事物に対して淡白
- 2) 粘液質 (移住・拡大性: 呑気・平気) ……事物に対して冷淡で思慮深い
- 3) (黄)胆汁質 (闘争・攻撃性: 短気) ……熟慮を欠いて怒り易い
- 4) 黒胆汁質・憂鬱質・神経質・貧血質 (隠遁・探究性: 陰気) ……哀愁に傾いて用心深い。

気 (質) に関する日常的な言葉は種々ある。気位が高い (優越の気), 気立てがいい (親切の気), 気が合う・気がおけない・気にくわない・気が合わない (好嫌の気), 気になる (心配・好奇心の気), よく気がつく・気さくな (注意の気), 気まりが悪い (羞恥の気), 気おくれがする (接触の気), 強気と弱気, 短気と気長またはのんびりした気, 発達または進々の気または新進気鋭と退嬰の気または因循の気, 牽先・指導の気と女房気取または追従の気等々である。この気の問題についてはまた論をあらためたい。

しかし一般に気または気質や気性は、どのように解釈されているだろうか。われわれは, Allport の気質論に依ってこの稿の末尾としたい。

Temperament はパーソナリティと屢々混同されるが, (ここでも) 性格と同様に慣用的に区別される明確な根拠がある。気質は通常素質 (disposition) に関していうもので, 生物学的生理学的決定因と密接に連携し, その結果, 発達と共に比較的变化するところが少いものである。遺伝の役割が, (もちろん), パーソナリティの他の局面よりも大なる位置を占めている部面であって, パーソナリティに対し, 特別な下屬領域を占めている。

「気質は, 個人の情緒的性質の性格的現象に関与するものであって, 情緒的な刺戟反応の場合の感受性, いつも決った反応の強さや速さ (気性の決定傾向), 支配的情緒性の質, 彷徨の特異性 (回帰性か否か), 情緒の内部強度 (気の張り) 等を含むものである。こうした現象は, 体質的な構造に依存するものであって, 本来は遺伝的なものに大きく依存している」 (Allport 1937.)。 (1967.6.3脱稿)

#### 参 考 引 用 文 献

- 宮瀬陸夫: 東洋哲学の根本思想 1941<sup>1</sup>, 1943<sup>3</sup> 日黒書店  
長原芳郎: 大気の底 1959 雄鶏社



- 今田恵：心理学史 1962<sup>1</sup>, 1966<sup>3</sup> 岩波書店  
杉靖三郎・石田周三編：人間の生態 人間の科学 I, 1956 中山書店  
渡辺徹：人格論 1912 精美堂  
佐藤幸治：人格心理学 心理学全書 11, 1961 創元社  
心と身体下, 精神身体医学講座 2, 1957 日本教文社  
生命と精神の心理学 現代心理学 1 1954 河出書房  
人間性の心理学 現代心理学 4 1954 河出書房  
William J. Pitt & Jacob A. Goldberg, : Psychology 1954  
Willy Hellpach, : Sozial-Psychologie 1951  
Calvan S. Hall & Gardner Lindzey, : Thories of Personality 1957  
性格の理論 性格心理学講座 1, 1961<sup>1</sup>, 1966<sup>6</sup> 金子書房  
詫摩武俊編著：性格の理論 1967 誠信書房  
柴野忠義：社会心理 (Mitseele) の根源現象について—W・ヘルパッハ (1877~1955) による—  
年報社会心理学 1964 第5号 勁草書房  
矢田部達郎監修：改訂心理学初歩 1956 創元社  
大西憲明：性格診断の理論と方法 1951 黎明書房  
心理学辞典 1957 平凡社  
小林幹夫：実存分析と行動確率による性格型決定方法の一考察 沼津工業高等専門学校研究報告  
第一号 1964  
南博編：現代人の心理学 心理学新事典 1964 河出書房新社  
Albert Wellek: Die Polarität im Aufbau des Charakters; system der charakterkunde  
1950  
E. Kretschmer: Körperbau und Charakter: untersuchungen zum konstitutions problm  
und lehre von den temperamenten 1951. Springer Verlag  
クレッチマー著, 相場均訳：体格と性格, 体質の問題および気質の学説によせる研究, 1964 文  
光堂  
現代教育心理学大系 総論 1958 中山書店  
ポール・フレス, 島田実・岩脇三良共訳：実験心理学 1967 文庫クセジュ 白水社  
芝田進午：人間性と人格理論 1965 青木書店  
沢庵：沢庵誓搜集 卷五 1674 (延宝2年) 書肆伊藤五郎兵衛刊行